

## 創刊特別寄稿

## 新生人間科学部心理学科に向けて

伊藤博子



1973年 文学部人文学科入職，2007年 文学部心理学科退職  
役職：実習助手

今年度から新たに人間科学部心理学科が開設され、心理学科が大きな発展を遂げたことは大変喜ばしいこととお祝い申し上げます。5月に開催されたホームカミングデイに参加して施設・設備を見学させていただきました。心理学科専用スペースが以前の倍以上の広さとなり、各分野の実習室と準備室が区画ごとに機能的に配置されていたことが印象に残りました。実習室が不足がちであった頃に比べ、心理学科の教育・研究環境は数段向上したのではないのでしょうか。短い時間にざっと拝見しただけなので、細部までよく思い出すことができませんが、今後、この恵まれた環境が最大限生かされ、より質の高い教育・研究活動が展開されていくことと期待しております。

私は昭和48年に入職し、平成19年まで33年間心理学研究室に勤務しました。入職当時の文学部人文学科心理学コースは昭和41年コース設立時とほぼ同じ規模であったとお聞きしておりますので、実習助手の目から見て、初期の心理学コースがどんなものであったか、記憶をたどってみたいと思います。

当時、専任の先生は4人、心理学コースのスペースは4階の2ブロックのみで、こじんまりしたものでした。心理の設備としては脳波室、シールドルーム、暗室があり、他に先生方の個人研究室2室と研究室、学生控室がありました。先生方は1室をお二人で使われていました。1学年の人数は年により変動がありましたが、70名から80名くらいでした。

学生数からみると、心理全体の広さは十分でなく、必要な機器も不足していましたが、当時の状況として、致し方のないことであったのだと思います。研究室は在職中のほとんどの時間を過ごした場所だけに、懐かしいところです。ここは実習助手の執務室であると同時に、会議室、非常勤の先生方の控室など、実に多用途に使われた部屋でした。先生方が学生さんの指導をされることも度々ありました。卒論の口述試験も数日かけてここで行われていたのです。

実習助手の仕事を覚えていくことができたのは、先生方の直接のご指導があったからですが、先生方が研究室にいらした折に心理学教育についてのお考えを、お話くださったことも、仕事の糧になっていました。また、非常勤の先生方や研究室を訪ねてこられる方たちとお話する機会が与えられたことは、貴重な経験となりました。研究室という多くの方が集まる部屋で仕事ができたとの役得で、これは退職するまで、続けました。

当時心理には印刷機、コピー機などの事務機器がなく、通信機器は5階の文学部受付との間のインターホンだけで、内線も直通電話もありませんでした。多少不便を感じてはいましたが、仕事は手書き、電卓使用で行っていた時代で、仕事の量もそれほど多くなく、遣り繰りできていたのです。名簿を何度も手書きしたことで、学生さんの名前を自然と記憶できるという良い面もありました。

心理学コースはその後、専任の先生が徐々に増えて、充実していきましたが、心理が大きく発展したのは平成4年の大学院設置時でした。設備面では、4号館4階が大幅に改修され、現在の4階の原型が

できたのです。けれども、それまでに、小さなステップがたくさんあり、その一つ一つがのちの大きな飛躍につながったと考えています。その時々先生方のお力が大変大きかったのです。

例えば直通電話が導入されたことは、小さい変化ではありましたが、それがデータ通信利用のためであったことは、心理のITネットワーク時代の初めの一歩であったと言えます。また、実習室の不足を補うために、研究室に隣接する教室を借用し、ベニヤ板で部屋を区切って使用していた時期もありました。やがてここはパーティションで区切られ、正式に心理実習室となりました。少しずつ心理のスペースが増え、機器も備わっていきました。

心理学コース時代の歩みは比較的緩やかでしたが、新学部心理学科の設立はこれまでにない大きな事業であるだけに、関係者の方々の途方もないご努力があつてのことと思います。4月新学期を無事に迎えるために、引越しなど具体的作業にあたった先生方、スタッフの皆様のご苦勞にも思い至りました。

今後も心理学科は進化し続けていくことと思います。心理学科がどのような姿に発展していくのか、楽しみです。ときどきホームページで心理学科の発展ぶりを拝見したいと思います。